私の夢見る絵と心の旅／上橋望海さん（22歳）

小さい頃よく目にした絵があります。地球の周りを様々な人たちが手をつないで輪になっている絵です。その絵からは、民族・人種・宗教などでは差別されない平和と、互いを認め尊重しあう共感を感じます。私はその絵が大好きで「あなたも輪の一員なんだよ。」と誘っているように思えて、将来はこの絵のように世界中の人と友達になりたいと夢見ていました。しかし大人になるにつれ知っていく現実は、自分の夢見ている絵とは違う現実なのだと思い知りました。自分と同じように平和で衣食住に困らない国ばかりではなく、そうでない国、争いを続ける国もあるのだということに気付き、なぜこんなにも住環境が違うのか、この不条理を無くすにはどうすれば良いのかと疑問が生まれました。これが私の海外に行こうと思い始めたきっかけです。

大学で、児童学を専門に勉強している私は2年生の夏、初めてフィリピンに行きました。フィリピンには、スモーキーマウンテンというゴミで出来た山があります。

そこでは、ごみ拾いをして生活を成り立たせている人たちがいる。まだ小学校にも上がらない子どもたちが大人に交じりゴミを拾うという現実を、テレビの映像を見て知りました。私の行ったイロイロ市では、周辺の約42万人から出るゴミを受け入れる投棄場があり、その周りを約３０００人の人たちが住んでいる所でした。初めて目の当たりにしたスモーキーマウンテンのゴミの多さが激臭と重なり、吐き気がしたのを覚えています。もっとも衝撃だったのが、巨大なゴミ山の横を流れている川の汚水、それに気にすることなく子どもたちがそばで遊んでいる姿でした。周辺をまわった私は、現地のスタッフ達とある一家を訪ねました。母親とその子どもたち5人が暮らすその家は、ゴミ山のほぼ真横の位置にありました。私が母親の話を聞きながら、横でふざけ遊ぶ子どもたちの姿を見ていると、突然彼らは駆け出しゴミ山を登り始めたのです。「危ない!!」と反射的に叫んだ私は、母親に「どうしてこんな場所に家を建てたのか。子どもがけがをしたらどうするのだ。」と訴えてしまい、同時に涙も流れてしまいました。すると帰る間際、母親は私の手を握り「私だって、いつまでもここにいたいとは思わない。大学に行きたい夢があるし、子どもたちだって学校に行きたいという夢がある。」と言いました。スモーキーマウンテンでゴミを拾って稼ぐ1日の平均収入は70～150ペソ程だと知りました（1ペソが約2円）。この場所で安全に生きていけるのかも分からない環境下でも、彼女たちには学校に行きたいという夢があるということを知りました。そしてそれは、目の前の現状をどうかしたいというよりも、それを乗り越えた先にある夢を掴みとりた

い、という彼女たちの強い想いなのだと感じました。それでも今はこの場所で働くしかない、ここにいるしかないのだという歯がゆい想い、やるせない現実が私には伝わったのです。

私には、大学院に行くという夢があります。けれどもそこに行く上で乗り越えなければならない経済面の壁があります。状況は違っていても、目の前の置かれた現状よりもその先により強い想い、叶えたいものがあると、共感が持てました。帰国してから私は、彼女たちがこの状況から抜け出すためには何が必要なのかと考えるようになりました。今の生活を支えつつも、学費をためていく必要があって、そのためには今よりももっと安定した収入が必要でしょう。そうするためにもやはり、スモーキーマウンテンの存在はあるべきでないと思いました。これが存在する限り、彼女たちの想いは叶うことのない、負の連鎖が続いていくでしょう。しかし、スモーキーマウンテンには多くの失業者だった人達が集いゴミを拾っています。拾えばお金になる収入源が目の前にはあるのです。現地の人間でもない自分が、ただスモーキーマウンテンの存在を否定したってなにも変わらないのです。こうしたスモーキーマウンテンをめぐる悪循環は、これをどうにかしたいという私の想いを複雑にさせました。

3月に私は、1年の頃から所属している研究会のメンバー達と鹿児島の志布志市を訪れました。志布志市はゴミのリサイクル率が全国の市町村で第2位、市として

は全国第1位の記録があります。市民は生活から出る多くのゴミを約24種類にも分別をし、それらを市が運営するリサイクルセンターがさらに細かく色別に分別します。生ごみ等は木くずと混ぜて発酵させ、堆肥を作り有機栽培の促進を図っているとのことでした。そして、どうしても再利用されないゴミだけが埋め立て処理されるとのことです。その埋め立て場所も非常にコンパクトに設計されてあり、ゴミがなだれ落ちないように高さを揃え、ブロック別に分ける工夫が施されていました。

志布志市の取り組むこの循環型の政策は、フィリピンにもあてはめられないだろうかとその時思いました。この政策によって、フィリピンのゴミ山の問題で苦しむ場所から雇用を生みだせないでしょうか。ゴミを拾って暮らすウエストピッカーズが、今よりももっと安定した収入は得られないでしょうか。かつて国の恥部として存在していたスモーキーマウンテンの存在が解消できないでしょうか。そうすれば、私が現地で出会った母親と子どもたちの住む環境も、生活も改善されないでしょうか。学校に行く希望は見えてこないでしょうか。この問題を解決すべきは先進国の人間ではなく、現地にいる彼らであり、私たちのできることは、経験から得た情報を提供することと彼らが自立していけるまでの支えとなることぐらいでしょう。これらの考えから私は、フィリピンの抱えるこの問題に対し少しの希望が持てました。

「君が現地に行ったところで何ができる。君のしていることは単なる偽善にすぎないよ。」私がフィリピンに行く前、後によく耳にした言葉でした。私は、たとえ知っていても、画面越しから見る世界の現状に目を背け、何も行動に起こさない人よりはマシだ、と思っていました。しかしイロイロ市の現状を自分の目で確かめ涙しただけの自分では、彼らが言った偽善となんら変わらないことに気付かされました。私の志布志市から学んだ政策の当てはめは、浅はかな考えから生まれた絵空事と思うかもしれません。それでも私は、先進国の人間がただ手を差しのべるだけではない、彼ら自身が自ら立ち上がっていけるその可能性に希望が持てました。小さい頃に夢見ていたあの"絵"に近づけるのかもしれないと思ったのです。それがどんなに夢物語だと言われようが、偽善だと言われようが、私のこの「実現したい」という想いは曲げたくありません。今の私はあの頃とは違う、でも本心は小さい頃から何も変わっていないのだと示したいのです。

そのことを気付かせてくれたのが"旅"でした。画面越しから見た現実に、居てもたってもいられず気が付けばスモーキーマウンテンを見上げていました。親子たちと出会い、感情の衝突によって生まれてきた問題意識、その解決するための道筋を探しに行く、この過程は画面越しだけでは決して至らないでしょう。まだ自分の中に眠っていた発想が旅を通じて覚醒されていくようで、旅は私にとってそれは重要なことだったのだと気付かせてくれたのです。

ピースボートの始まりは、私が生まれる以前の、東西冷戦時であったことを知りました。社会主義国と資本主義国2つのイデオロギーの対立が世界を二分させ、これまでの殺しあう対立とは違った対立が繰り広げられました。それに終止符を打ったベルリンの壁崩壊は、世界が本当の意味で平和共存へ歩もうと試みた瞬間だったと思えます。しかし、そこから27年の時を経た今、未だ世界には民族・人種・宗教的な差別が続き、各地で紛争問題も心配されています。

私は最近「構造的暴力」という言葉の意味を知りました。物的なもの、心理的なものといった様々な形態の中でも、貧困・飢餓・抑制・差別などといった間接的で潜在的な形態のものがあります。これらの存在する今の社会では、本当の意味での平和とは言えないでしょう。

日本には沖縄の基地問題があり、辺野古基地の移設に対する反対運動は今でも続いています。日本には、憲法第9条のもと、武力を持たない決まりがあるにも関わらず、米国からの武力に頼ったり、自国を守るための自衛隊を海外に派遣させようとしたりと、平和的な方針から遠ざかっていくように思えます。去年の夏、安倍政権は多くの反対を押し切って安全保障関連法案を通してしまいました。納得のいかなかった私は、鹿児島の反対集会に参加しました。学生代表として大集会の場でスピーチをし、強行採決される最後の日まで先頭に立って皆と抗議し続けました。反対運動と沖縄問題を調べていく中で、フィリピンにもかつては米軍基地があったこ

とを知りました。その基地は、民衆の反対を先頭に当時アキノ政権時には撤去されていることを知りました。フィリピンは米国の武力に頼ることなく、自力で平和構築への道を歩んでいく方針をとったのだと私には思えました。過去に基地提案を拒否し自立を臨んだ発展途上国と、未だ武力にすがる先進国と、どちらが平和共存を考えているでしょう。

私のフィリピンの旅と安保法制反対運動は、はたから見れば関係ないように思うかもしれません。私もこの二つの行動の始まりは理論的ではなく感情から来るものでした。しかし今私が思う平和とは、直接的暴力の無い状態（消極的平和）と構造的暴力の無い状態（積極的平和）の二つを実現した先に見えてくるものでしょう。間接的な抑圧によって虐げるのではなく、価値観の相違や誤解を解消していく努力をすること、そのためには私たちがまず自分の目で確かめに行くことから始めるのが大切だと思います。この世界はまだ平和への道を志向していません。解決しなければならない問題がたくさんあります。私がこれまで行ってきた国はほんのわずかですが、それらすべてには独自の文化があり、人の温かみを感じます。出会ってきた彼らと、これから出会って行く人たちと共に目指していきたいと思います。

私の名前は、“海を望む者”と書いて望海と言います。この名前のように私は、海を越えて希望を繋いでいく人になりたいのです。

ピースボートは、私と誰かを繋ぐ懸け橋となる。そして私が誰かと誰かを繋ぐ懸け橋となる。今度は彼らが懸け橋となる。これが私の想い描く“絵”なのです。